

## 【高齢者の生きがい】

東海社会福祉科学研究所

大北 秀雄

### 2 高齢者の生き方

#### (2) 高齢者の状況

――続き――

#### 第4 【老人・高齢者】

##### 1 「老人から高齢者」

###### (1) 老人・老年期

- ・「老」という漢字は腰の曲がった人が杖をついている姿を表した象形文字で、年をとることによって起こる衰えを表現しているといわれています。
- ・老年期は、一般に老いの始まる時期、あるいは老いがはっきりと現れる時期と定義されています。
- ・人の発達段階からみると、老年期とは成人期に引き続く人生最後の時期と定義されており、その境界となる年齢は一般に65歳とされています。
- ・65歳以上を老年期と定めた根拠は不明です。
- ・一説では、19世紀・ドイツの政治家ビスマルクが年金制度を定めた際に、その当時65歳を超えて長生きする人はごくまれという理由で、65歳以上を老人と定義したといわれています。

###### (2) 老人・高齢者

- ・「老」という言葉は、古くは「長老」「老中」などで代表されるように、尊敬の意味が込められていました。
- ・現在は、「老害」「老醜」などで代表されるように、マイナスのイメージが強くなり、「老人」という言葉は使わず、「高齢者」という言葉を用いるのが一般化しています。
- ・一般に65歳以上の人を高齢者、さらに65～75歳の人を前期高齢者、75歳以上の人を後期高齢者としています。
- ・医学の進歩により人の平均寿命が急速に延び、人生80年時代の現在では、老年期を65歳以上として一括する単純な定義では、時代の動きにそぐわないと考えられています。

###### (3) 「若い」とは

- ・「若い」に対する考え方は、人によって異なり、平均寿命が延びた現在、20～30年前に比べて元気で活動的な高齢者が増えています。
- ・平均寿命が50代前後であった戦前と80代の現在とでは、社会の情勢も大

大きく変化しています。

- 平均寿命は、地域的な差もあり、暦年齢で老年期の定義をするにあたっては、時代的、地域的および社会的な背景などを考慮することが必要です。
- 医学的観点は、加齢に伴う身体機能の低下が顕著になるのは75歳以上なので、75歳以上を高齢者とすべきとの意見もあります。
- このような状況を考慮して、米国のニューガーデンは1975年に老年期を暦年齢ではなく、社会的活動度を指標として老年前期（ヤング・オールド）と老年後期（オールド・オールド）の2つに分けることを提唱しています。

#### （4）老年とは

- 老年前期は、労働や子育てなどの社会的な責務から解放され、社会的活動に自分の時間を費やすことが可能な世代です。
- 一方、老年後期は、旧来の意味での老年期で、心身の衰えによって特徴づけられる時期です。
- 前期と後期の境は、75～80歳くらいですが、これは目安であり、前期と後期を区別する重要な物差しは、社会的活動度であるとされています。
- また、老年前期・後期のほかに、超高齢期（オールデスト・オールド）を加え、3段階に分類する人もいます。この場合、超高齢期の境界となる暦年齢は85～90歳とされています。

## 2 「老化に伴う心の変化」

### (1) 知能

- 知能は、年をとると衰えると考えられていましたが、現在知能は、20代以降も発達し続け、少なくとも80歳くらいまでは社会生活に必要な機能が維持できることが証明されています。
- 高齢者でとくに問題になるのは、記憶力（ものを覚える力）の低下です。  
「記憶力の低下」  
聞いたことをすぐ忘れる  
同じことを何度も聞く  
などの症状により気づきます。
- それに比べて、古い記憶は高齢になっても比較的よく保たれていますが、それも徐々に不正確になり、思い出せないことが多くなってきます。
- したがって社会生活に支障を来すほどの記憶力の衰えが認められた時には、老年期認知症などの疾患が疑われます。

## (2) 流動性知能と結晶性知能

- ・人の知能は流動性知能（記銘力、計算能力など）と結晶性知能（判断力、総合力）の2つに大別されます。
- ・一般には、流動性知能は30歳以降、ほぼ直線的に低下しますが、結晶性知能は高齢になっても低下しない状態です。
- ・若い時には、理解できなかったことが年をとって初めて理解できるということはしばしば経験されることです。
- ・年をとったら皆ぼけるというのは、大きな間違いで、老年期認知症の患者さんは65歳以上の高齢者の概ね5～6%です。
- ・高齢者でも結晶性知能にますます磨きがかかり、各分野でリーダーとして活躍している人が大勢います。
- ・高齢者のなかには、知的資産家とも呼ぶべき、若い人とは異質の知能をもった人が大勢います。

## (3) 人格・心理的側面

- ・昔から高齢者の性格の特徴は、がんこ、利己的、愚痴っぽい、疑い深い、心氣的（いらいらしがち）であるなどがあげられています。
- ・しかし、従来いわれてきたがんこさは認知症によることが多く、また抑うつ傾向はうつ病によるものと考えられています。
- ・このような病的状態でみられる特徴と、正常な高齢者の人格の変化が混同されている場合が多くあります。
- ・人の人格は、成人期～老年期を通じて比較的安定していて、青年期までにつくり上げられた人格の基本的な部分は変わらず、加齢的变化よりも世代の違いや性差の影響のほうが大きいといわれています。
- ・60歳以上の人で多く認められる性格は、保守性、あきらめ、義理堅さ、依存的などです。
- ・従来多いとされていた嫉妬、不満、懐疑心などは、多くなかったとの調査結果があります。
- ・ただし、75歳以上の高齢者では、活動性の減退・身体的不自由に関する不安、不満、短気などの訴えが多いです。